

くださいと言ひ残して日本に帰るつもりである。アロル・スターまでの引揚ですめばよいがというのが私の今の気持である。というのはインドネシア軍のポンチェン・クチールへの上陸とラバイへの降下で、ここ数日来とみにインドネシアのコンフロンティションが緊迫

の度を加え、この村にも自衛団が組織されたりしているし、9月7日にはヤン・デ・プルツアン・アゴン(king)はマライシア全土に緊急令を發布したからである。雨雲ばかりでなく戦雲まで動きは始めている。(1964.9.10アロル・ジャングスにて)

タイ国北部のカレン族調査ノート

飯 島 茂

仕事の都合で2カ月余り蒸し暑い Bangkok に釘付けになっていたわたくしにとっては、空から眺める Chiangmai 盆地の景色がなんと美しかったことか。飛行機のタラップから降りると、目の前にある Doi Sutep の山肌の緑が目にも痛い。それに吹いて来る風の甘さも格別である。やっぱり Chiangmai を調査の基地に選んでよかったとわたくしは思う。

こう書いてくると、すべてがいかにも快調のようだが、心の底にはなにか重くのしかかるものがある。それと言うのもわたくしがタイ国の研究についてはあまり自信がなかったからである。今年の2月末にセンターからタイ国に出張を命ぜられるまでは、仲間の矢野さんたちとともに、すっかりビルマ熱に侵されていて「今ビルマに行けば、1964年のビルマはわれらのものになる…」などとうわごとのようなことをたがいに言いながら、いそいそとビルマ関係の文献をあさっていたのである。しかし、残念なことにはビルマの政治情勢は日まじに複雑化して、今春になってついに外国研究者の長期滞在は事実上不可能であるという見通しになる。

このようにして、東南アジア研究センターのコー・プロジェクトの一つであるビルマ班はタイ村落調査班に再編成され、本岡武助教授をリーダーとして、水野浩一、矢野暢両氏にわたくしが加って、1964年4月から1965年4月にかけてタイ国で調査に従事することになった。

わたくしはタイ国研究の素人なので、バンコックに着くなり、あわててこの国の勉強を始めた。チュラロンコンやタマサートの大学図書館や Siam Society

の図書館に通ってみる。しかし、幸か不幸かこの国の山地民の研究ははなはだ少いようである。わたくしの心の中でハイド氏の方は「やれやれ、これで文献調査の方が少し助った…」と言う。一方ジギル氏の方は「これはえらいことになった、どうやって仕事にとりかかろう…」と途方にくれる。このような複雑な気持をかかえながらわたくしは Bangkok から Chiangmai に移ったのである。

いずれにせよ調査の準備に入らねばならないのだが、もっとも新しい Gordon Young の “Hill Tribes in Northern Thailand” にしても総括的すぎてそれだけでは調査地の見当をつけることすら無理である。それに北部タイの人のように山地民に囲まれて暮している人々でも平地の人はほとんど山のことを知らない。とにかく自分で現地を歩いて見なければ何も解らないと言う至極当然のことが再確認できた訳である。わたくしは Chiangmai を中心に Doi-Chiangdao, Doi-Musur, Hod, Mae Sarieng など、南北に約600キロ、東西に約100キロにわたりルコネッサンスを重ねる。その間わたくしはいくつかの条件を考慮に入れながら調査対象に選ぶ山地民をだんだんとしぼっていった。その結果 Karen 族を調査することに決定したのは、だいたい、つぎのような考えにもとづいたからである。

1) タイ国北部には大把みに言って、二系統の山地民が住んでいる。その一つは Sino-Tibetan 系の山地民と、他は Austroasiatic 系の者である。わたくしは従来ヒマラヤ山中に住む Tibet 系住民の研究に従事してきた関係から、当然タイ国でも Sino-Tibetan



S'kaw Karen の老人と孫

系の山地民に興味に向いた。

2) これは意外に知られていない事実であるが、Karen はタイ国における非タイ系住民の中で中国系住民に次いで大きな人口を持つ重要な民族集団である。Gordon Young の1960年における推定によると、山地民約217,000人中約71,400人で山地民人口の1/3以上を占めていると言う。人によっては山地民の人口を約400,000~500,000人とふみ、その半数の約200,000~250,000人がKaren であると推定しているほどである。

それに Karen は隣国ビルマにおいては一州を形成しているほど重要な民族集団である。いつの日かやがてわたくしたちも国境の向う側に行って Karen を自由に研究できる日もあるだ

ろう。その時のためにもタイ国の Karen を研究しておくことは役に立つだろう。

3) タイ国の Karen は山地民の中では例外的にゆるやかながら多数の者の移動が山地から平地へ向って、またビルマ方面からタイ国領へとおこなわれてきた。その移動波の新旧の差により、タイ族（おもに Khon Muang）との文化接触の程度の差が見出され、文化変容の研究に格好のフィールドを提供している。

4) さらにタイ国政府内務省公共福祉局山地民課はわたくしに山地 Karen の調査を強く希望した。それと言うのは山地民の研究は次第に盛になってきていて、最近では Pataya などのタイ国の学者はもとより、外国からは L. Sharp, L. Hanks, H. Manndorff, P. Kunstadter, F. LeBar その他の人類学者によって手がけられているにもかかわらず、ほとんどが Lahu, Lissu, Akha, Meo, Yao, Khamu, Lawa などに集中していて、Karen の研究は意外に少かった。日本からは大阪市大の岩田慶治氏や東大の大林太郎氏などがこの地方に入っているが、Karen に研究の中心を置かれていなかったように思われる。わずかに J. Hamilton が2年ほど前に Wang Lung で平地の P'wo Karen を集約的調査しただけである。

タイ国の Karen は S'kaw, P'wo, B'ghwe, Th-aungthu の4グループに分れている。わたくしはその中で Karen の人口の過半数を占めていると言われる S'kaw Karen を調査することに決めた。

このようにして、当初、雲を把むような調査計画も



S'kaw Karen の山村、裏山には何年前に焼畑がおこなわれた跡が見える。



S'kaw Karen の男子

ルコネッサンスを数回重ねる間に次第に具体性をおびていった。そしてわたくしが調査地に決めた場所は Chiangmai から西南方に175キロメートルほど行った Mae Sarieng 地区にある一山村である¹⁾。標高は約1,050メートルほどの所にあるこの村は23戸からなる S'kaw Karen の村である。村の農業は陸稲のほかには少しばかりの水稲と自家用の貧しい菜園を持つのみである。家畜としては少数の象、水牛、豚、やぎ、鶏を飼っている。象はチーク運びなどの労役に使われ、水牛ややぎはタイ人の仲買い人に売られ若干の現金を村にもたらす。しかし、豚と鶏はおもに儀礼のいけにえ用に使用されるだけである。従って村の経済はほとんど自給の域を出ない。しかしながらこの村落社会は近年になって急激な変化をよぎなくされるようになった。その原因を大括弧に要約すると次のようになるであろう。

- 1) 政府の行政が次第にこのような奥地にまで及ぶようになってきた。
- 2) 平地部の市場経済の影響が波及するようになってきた。
- 3) Hod と Mae Sarieng をつなぐハイウェイの工事が進

み、村から数キロメートルの所にタイ人の道路工事のキャンプができた。それにより好むと好まざるとにかかわらず、タイ文化との接触をよぎなくされるようになった。

これら三つの原因のなかでこの地方の Karen の社会に最大の衝撃を与えたものは政府の影響であろう。それがもっとも典型的に現われたのは山地民に対する焼畑耕作の制限である。この行政措置のおもなねらいは山地民の間で広くおこなわれていた麻薬の原料になるケシ栽培を

押えることと、タイ国中部の穀倉地帯を潤す Chao Phraya などの河川の水源における森林を保護するのが目的であった。これは中央政府の当然の措置であったが、山地 Karen のみならず、他の山地民にかなり深刻な影響を与えたことは間違いない。森林を焼却することを禁じられたかれらは陸稲を中心とした焼畑農業から水稲を中心とする定着農業に移らなければならなかった。しかし、水田を開拓すると言っても、すでに適地はタイ人によって占取されている。その上、陸稲は山地民の低い施肥技術の水準から言うと、焼畑をして新しい土地を次々と開拓して畑地に変えてゆか



水田で草取りをしている S'kaw Karen の女たち。

①村の実名は村人のプライバシーを守るために発表を差し控える。報告書にも仮名を使用する予定である。

い限り、反当収量が毎年急速に低下してしまう。新しい森林を開けない現在、わたくしの調査村の Karen などは畑を約7年休閑して、ロテーションをしている。しかし、それとても地力の回復は充分とは言えず、近年生活が苦しくなったと言う。

第2に Karen の場合、焼畑の制限のために結婚後男が女の家に行って住むという matrilocal な伝統的居住形態が維持しにくくなり、最近では与えられた条件によって任意に居住形態を決める ambilocal な傾向が現われてきた。婚姻後の居住形態を決める要因が従来の慣行的なものから、むしろ田畑が夫の方にあるか妻の方にあるかというような経済的なものになりつつあるようだ。

第3に焼畑はかれらの重要な経済活動のみならず、Karen にとってはそれをする事によって、山の霊を慰むという信仰生活の一部でもあった。そのため焼畑の制限はかれらの信仰に混乱を与えた。村が移動をしなくなったので、それにとまってかつては Karen の儀礼の中でもっとも重要な Talupadu のようなものが急速に簡略化もしくは消滅しつつある。このように山地 Karen の文化変容の速度は非常に大きく、時には平地の Karen を追い越すほどである。たとえば平地に分布し、よりタイ文化に親んでいる P'wo Karen (時には一部の S'kaw Karen) ですらまだ男が Karen 特有の長髪をまるめた伝統的なスタイルを守っている者が少ない。しかしながら、山地の Karen の間ではもはやほとんどそのような伝統的な髪形を保持している者はいない。その理由を尋ねてみると、ある Karen は「近頃は畑にする土地が限られてきたので、生活が以前より少なからず苦しくなってきた。だから、髪などのなり風に時間をかけられなくなった」と言うのである。果してこれがどれだけこの種の急激な文化変容の原因を説明しているかどうかは別として、焼畑による森林の開拓禁止という政府の行政指導は Karen をはじめとする山地民の社会に意外に大きな衝撃を与えていることは事実のようである。

その衝撃が山地民の経済に与えた影響も少なくはない。ケン栽培は Karen の間ではあまり盛んではなかったけれど、Meo, Yao, Akha, Lahu, Lissu などの山地民の間では重要な生業の一つであった。場所によっては1戸当たり年間に約3,000~4,000バーツ (54,0

00~72,000円位) の純収益をもたらしていた。この額は山地民にとって決して少い額の金ではない。しかしながら、タイ国政府の熱心な努力にもかかわらず、今日までのところケンに代る商業作物は見出されていない。ある程度粗放栽培が可能で収益が高く、かつ山道を運送しやすいという条件を満す農作物はなかなか無いのである。

以上のように、中央の影響がへき地に及んだ場合に生ずる混乱というものは決してタイ国だけの問題では無い。これは発展しつつある国における nation building の不可避な過程なのである。

市場経済の山地 Karen 社会に与えている影響であるが、近年においてはいちじるしいものがあるけれども、大部分の山村の経済はまだ自給の域を出ていないので、市場経済の影響は構造的なものにまでは及んでいないようである。しかしながら、タイ文化の影響が歴史的に見てもかなり長い期間にわたって Karen の文化の上に及んできたものであるから、ビル



平地から来た P'wo Karen の一家。かれらには仏教の影響が強い。

マの Karen と比較するとかなり cultural drift をおこしているようである。それは言語にタイ系の単語が混入しているだけではなく、儀礼の中にもタイ人もしくはタイ国北部に古くから定着している Lawa 族などと類似するものが目につく。

さらに Karen のタイ化の過程で人類学的に興味を引くのは仏教化の問題であろう。山地 Karen にはまだ本格的な仏教の影響は無く、animism がその信仰生活の基礎になっている。そのような状態のところにはローマン・カトリックやバプティストの宣教師が入り込んでいるけれども、ビルマのような旧植民地国家とは異なり基督教の Karen を初めとする山地民への影響は決定的なものにはなっていない。

このような山地 Karen に比べて、平地 Karen は日常仏教徒であるタイ人や Lawa 族と接触しているので、仏教の影響が大きい。とりわけ P'wo Karen においてその傾向が顕著である。しかしながら、平地の Skaw Karen もその例外ではない。もちろん、Karen の仏教⁹⁾にはいまだかなりのアニミスティックな要素が残っていることは言うまでもない。

わたくしは当面山地の S'kaw Karen の調査に専念する積りであるけれども、目下滞在して調査をしているこの山村の調査が一段落したならば、20キロメートルほど西方にある Mae Sarieng の谷において、平

地に定着している S'kaw Karen を調査するつもりである。そして、山地と平地の Karen を比較することにより、山地民の plain emulation (平地の文化を模倣すること) の過程を研究する予定である。それは平地 Karen の文化のあり方は山地 Karen の文化の変容の方向になんらかの示唆を与えると思うからである。

調査村 ドーン・デーン グ

水野浩一

日本を離れて4ヶ月半、バンコックの生活からも遠ざかり、また設営の煩わしさからも解放されて、ようやく調査村に定着したところである。したがって、現

在までの活動状況をも交じえながら、村の様子について記してみようと思う。

村の名はドーン・デーン グといい、バンコックの東

